

## 青年期健常群における自己の記憶の想起および捉え方に関する探索的研究：臨床群の理解に向けて

藤本，裕子  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/8020>

---

出版情報：九州大学心理学研究. 7, pp.77-88, 2006-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# 青年期健常群における自己の記憶の想起および 捉え方に関する探索的研究

—臨床群の理解に向けて—

藤本 裕子 九州大学大学院人間環境学府

## How to recall and regard of the self-related memory in the normal adolescent group —A preliminary investigation for understanding of the clinical group—

Yuko Fujimoto (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of the present study was to investigate the aspect of the recollection about self-related memory concretely and the ordinary trait as regards to one's memory about normal adolescent group, university students. First, through the semi-structured interview for 12 students, it was observed that they recalled their episodic memory about themselves generally and abstractly. It was suggested the function of the schema about the self-structure, and basically the recollection was reconstructive through the interaction with the listener. Second, it was founded by the free description that most of subjects often and widely recalled their memory, having the stable chronological sense. Furthermore, most of them had the active attitude for dealing with the negative memory. These results were discussed as preliminary materials for the understanding of the clinical group, who have the traumatic memory.

**Keywords:** recall, episodic memory, normal adolescent group

### 問題と目的

記憶活動は、我々が日常生活を円滑に営むに際し、大きな役割を果たしている。知識や出来事の記憶は、のちの生活において、活用・応用できるもの、行動を調節できるものとなる。印象深い出来事を当時の感情を伴ってしみじみ思い出すなど、感情や身体感覚との関連も認められる。また、たとえば「こんなことがあった」と人に自分の体験を語ったり、ともに見聞きしたことについて思い出話をするとといった形での記憶の共有は、しばしば人と人との関係を円滑にする。そして、たいいていの人々が、自分の存在や他者との関係について、それほど不安にならなくてもよい程度に連続性・一貫性を感じることができるのは、過去のさまざまな記憶が保存されて自己の一部に組み込まれているからだろう。

こうした記憶の構造や機能については、主に、1960年代以降の認知心理学の台頭の中で研究が積み重ねられてきて、厳密に統制された実験室研究を通じ、長期記憶と短期記憶を想定する二重貯蔵モデルや、何段階もの処理過程を想定する処理水準モデルなど、いわば、人間を精密なコンピュータになぞらえた情報処理モデルとしての

検証が進んでいった。1970年代後半からは、生態学的妥当性 ecological validity (Neisser, 1978) の重視によって、記憶研究は、日常世界における実際の問題や自然な文脈を取り扱うことに注目が向けられることとなり (e.g. 井上・佐藤, 2002)、目撃証言研究や展望的記憶<sup>1)</sup>のほかに「その人がこれまでの人生で経験してきたさまざまな出来事に関する記憶」(佐藤, 2001)である自伝的記憶 autobiographical memory 研究や、記憶と感情との関連(谷口, 2002)により強い関心が集まっている。自伝的記憶については、その構造的モデルや (e.g. Conway & Pleydell-Pearce, 2000)、自分がどういう人間であるかの定義づけ・態度や価値観に関する方向づけ・行動調整・問題解決といった個人内機能などが指摘されている(レビューは佐藤, 2002)。ほかに、エピソード記憶の発生時期という発達の観点からの検討(上原, 2003)、他者と共有された過去を会話を通して想起する共同想起の研究(古山, 1994; 森, 1995)など、日常的な文脈に沿った記憶研究は多岐にわたっている。また、記憶に対する感情の影響については、主に、感情的な性質をもった記銘材料の記憶、自己や他者と結びついた材料の記憶、臨床的な立場からの抑うつ時の記憶減退といった3つの視点から検討が進められている(谷口, 1997)。パーソナリティや個人特性との関連についても、たとえば高不安者は情動的な刺激に注意を向けやすく、それに対する記

<sup>1)</sup> 今後しなければならないこと、未来の予定や計画に関する記憶(梅田, 2001・2002)。社会的トレーニングの効果が反映されるという。

憶表象が活性化されやすいこと(稲葉・大平, 2003), ネガティブな体験を防衛することによって不安を低減させようとする抑圧的コーピングスタイル *repressive coping style* を用いる者はネガティブな記憶や幼少期の記憶の想起において遅延や情動の乏しさ, 総数の少なさが見られること(Davis, 1987; Myers & Brewin, 1994)など, さまざまな示唆が得られている。さらに, 自我同一性の状態による自伝的記憶想起の差異について, 大学生や高齢者を対象に, 植之原(1993), Neimeyer & Metzler(1994), 野村(2002)が検討を行っている。

これらは, そのほとんどが非臨床群を対象とした一般心理学的研究, アナログ研究だが, 臨床群の理解にあたって対照させる基礎的な知見である(藤本, 印刷中)。クライアントの多くは, 前述したような自己の基盤や行動の調整・方向づけといった点において過去の記憶を適切に利用できない状態にあり, 往々にして確固とした自我同一性を持っておらず, 自他の認知に大きくバイアスがかかっている。それだけに, 学派や技法の違いはあれども, 過去に対する意味づけを変え, 再構成を進めていくことが治療の指針になることは多い(e.g. 森岡, 2002)。境界例患者に見られる, 過去の出来事があたかも現前で起こっているような過剰想起(長井, 1988)のように, 記憶がどう想起されるかが, 病態そのものを表す場合もある。また, 心的外傷後ストレス障害(PTSD)も, 出来事の記憶に付随する感情があまりに激烈であることがその定義に含まれる。他方, 抑圧・解離といったメカニズムによって, 記憶を意識することそのものができなくなることは, いわゆるヒステリーや多重人格といった病理にまで関連し得るといえる(岡野, 1995)。認知心理学者の小谷津(1985)は, 記憶の本質は想起であると述べ, 想起について「現在の状況や必要に応じ, 特定の知識やエピソードを意識下の世界から意識の世界に呼びもどし, 行為の展開と制御に役立たせること」とその性質を論じているが, 臨床群は, こうしたプロセスに失敗あるいは困難をきたしていると言えるだろう。さらに, 心理臨床では, 多くの場合, クライアントがどのような過去体験を想起するかのみならず, 「どのように」想起するかと

いった, 語り方や変容の様相が重要とされ, そこでは, セラピストとの関係性の影響も変数のひとつに組み込まれる。これはきわめて多面的, 個別的な過程であり, 必然的に, 臨床群のケースでは, 特殊性や現象学的な個性が強調されることとなるが, そうした個人差を考える上で, 評価の基準点としての *ordinary* な傾向を同じく多面的に把握しておくことの意義は大きい。

とはいえ, そもそも一般的な想起のかたちとはどのようなもので, 記銘・保持といった他の記憶プロセスとどう関係しているのかという点について, 自己認知や他者との関係性といった日常的な文脈と関連づけた研究はそれほど進んでいない。古くは Bartlett(1932)が, 説話の再生実験に見られた記憶内容の変容を説明する概念としてスキーマ<sup>2)</sup>を用い, 記憶の再構成的側面を強調し, その重要性こそ近年再評価されているものの, スキーマ研究そのものは人工知能や認知科学的な知覚過程解明の研究に向かっている(川崎, 1985)。語り手, 聞き手の関係性については, 臨床的なケース報告でこそクライアント-セラピスト関係として豊富に議論されているものの, 記憶の語り手-聞き手という関係において織りなされる基本的なダイナミズムについては, 前述の共同想起研究のほかは, 社会学者のライフヒストリー研究(e.g. 小林, 1992)において示されている程度であり, 議論を深める余地は大きい。さらに, 通常, 個々の記憶は人々の中でどのように位置づけ, 処理されるか, なかでも強い感情を喚起する記憶がどう処理されているのかは, 臨床群にそれらの混乱・困難が見られることに鑑みても<sup>3)</sup>重要な視点と考えられる。あるエピソードの個人の中での位置づけや感情との関係について見たものには, たとえば佐藤(2000), 神谷(2002)があるが, そうした一連の自伝的記憶研究においては, 筆記によりエピソードの想起を求めており, むしろ, 聞き手を前にしての語りの特質をみていくことが, 臨床的にはより重要であろう。加えて, 臨床で素材として持ち込まれるのは多くが自分に関連するエピソードであることから, 自己に関する記憶の処理や想起におけるごく一般的なあり方に注目する必要性は高い。

こうしたことをふまえ, 本研究では, (1)自己に関連した想起の具体的な態様について, 聞き手への発語を促す中で多面的に把握すること(研究1), (2)自伝的な記憶<sup>4)</sup>の個別的な位置づけ, 意味づけについて, 一般的な特徴を多面的に把握すること(研究2)を通し, 臨床群の記憶想起の特質理解に役立つ知見を得ることを目的とする。

## 研究 1

ここでの目的は, 想起が具体的にはどのような特性を

<sup>2)</sup> 過去経験を構造化した認知的枠組み。変容の特徴は, ①省略, ②合理化, ③強調, ④細部の変化, ⑤順序の入れ替え, ⑥被験者の態度の6点に整理できるとされた。

<sup>3)</sup> Putnam や van der Kolk としたトラウマ・解離の研究者は, 高い鮮明性をもち, 侵入的に突如想起され文脈が不明, 言語的に処理されず感覚性が強いといった特徴を持つ記憶を外傷性記憶と呼んでいる。

<sup>4)</sup> 「自伝的記憶」とは, 基本的に, 研究の対象が細分化・精緻化されている認知心理学的記憶研究における区分で, 「自伝的」, 自己との関連が強調されている。心理臨床で扱われる記憶も, わざわざ自伝的とは冠されないが, 自伝的記憶と重なるところが大きいと考えられ, 本稿では, そのような重複を考慮しつつ「記憶」という言葉を使用している。

有するかを検討することである。そのような目的に対し、欧米では、しばしば自伝的記憶検査 autobiographical memory test (Williams & Broadbent, 1986; 以下 AMT と略記) が用いられる。これは、ポジティブ、ネガティブな形容詞を手がかり語としてエピソードの想起を求め、反応潜時や総想起数、反応内容の特定性 specificity や概括性 generality<sup>5)</sup> を検討していくものである。基本的には、抑うつ者や自殺企図歴のある患者でエピソードの概括性が高い (過度に抽象化されている)、反応の個数が少ない (e.g. Williams & Scott, 1988) ことなどが明らかになっており、なかでも、特定性-概括性が体制化の程度を示すものとして大きな評価の軸とされる。体制化とは、関係情報が長期記憶から検索され、利用される際、必要な情報に常に的確にアクセスできるよう組織的に構成されることである (桐村, 2000)。一方、AMT では、対象者に示す手がかり語は個数も含めて一定であり、対象者が自覚している自己像に対する各語のあてはまり具合や、語のポジティブ-ネガティブといった感情価が想起成績に大きく影響することも示されている (Neimeyer & Metzler, 1994)。日常的な語りとは、ある手がかりによる自己注目や感情価といった複数の次元によって促進されるものと考えられるため、本研究では、AMT の手続きや評価の枠組みを用いつつ、野村 (2002) を参考に、エピソード想起の手がかりとして、自己への適合度の高い性格特性語を、内容的なポジティブ-ネガティブの次元からそれぞれ選択させるという手続きを採用する。また、実際の場面では、ある記憶が別の記憶を呼び起こしたり、会話の中で一連の出来事が次々と想起されることが多いと推測される (佐藤, 2002)。したがって、Brown & Schopflocher (1998) の event-cueing 法<sup>6)</sup> にならない、ポジティブ語・ネガティブ語についての各エピソードによって連想された内容に関しても問い、連想の展開のプロセスやエピソード間の連関について検討する。

## 方 法

**対 象** 授業を通じて協力を依頼 (『ものごとの記憶のしかたの個人差に関する心理学調査』と紹介し、研究の概要と実施場所、所要時間等を記した資料を配布した)、許可の得られた大学生12名 (男子2名、女子10名; 平均年齢20.58歳, SD=1.56)。

<sup>5)</sup> 特定性の高い反応とは、例えば「小学校2年生の運動会の徒競走で1番になった」であり、概括性の高い反応は例えば「母親に勉強のことでよく小言を言われた」である (谷口, 2002)。

<sup>6)</sup> 彼らの実験では、被検者が想起した特定の出来事を手がかりにしてさらに別の出来事の想起を求め、両者の関連を検討したところ、約半数のケースで、2つの出来事の因果連関、時間的接近、状況の類似が認められたという。

**手続き** 6畳ほどの広さの静かな個室において個別に面接し、対象者の許可を得て MD に録音したプロトコルを、事後に逐語に起こして分析した。実施は以下の流れによる。

**インタビューについての予備的検討** 自己のエピソードを想起するというデリケートな課題のため、計画段階においては、実施するインタビューの流れや質問の仕方、コンセンサスの取り方等に関し、侵入的でないか、研究の意図が伝わりやすいかどうかなど、臨床的配慮を中心に大学院生・学部生各1名のチェックを受けた。また、対象者には、インタビュー実施時に、プライバシーは完全に守られること・調査者である筆者が MD や記録の管理責任を負うこと・回答にあたっては拒否ができ、話したくないことは話さなくてよいこと・筆者への相談や質問がいつでも可能であることを説明した上で、筆者の連絡先を伝えた。また、調査終了時には感想を記入してもらい、対象者の気分状態や調査の受け止め方について確認を行った。なお、これらの配慮については、心理学・倫理ガイドブック (2000) を参考にした。

**手がかり語の選定** 野村 (2002) によって用いられた、自己概念測定尺度 (SD 尺度) から選定された形容詞対を使用した。その内訳は、「社交的な-孤独な」「開放的な-閉鎖的な」「頼もしい-頼りない」「意欲的な-無気力な」「責任感のある-無責任な」「きちんとした-だらしない」「親切な-いじわるな」「暖かい-冷たい」「気長な-短気な」「元気な-病弱な」「理性的な-感情的な」「慎重な-軽率な」である。

**想起課題** 以下のとおりである。A: ①12対の自己概念測定尺度 (SD 尺度) からの形容詞対から、ポジティブ語、ネガティブ語について「自己への適合度」が高いものをひとつずつ選択、②その語を手がかりとし、<〇〇という表現について、ご自分についてそうお感じになる理由となるような、これまでのある特定の経験や出来事を教えてください>との教示の下、具体的なエピソードをそれぞれ想起してもらった。B: ③ここまでの形容詞選択・発話の流れの中で連想されたことについて自由に話してもらった後、④調査の感想欄などを含んだ質問紙への記入をもって終了とした。なお、形容詞対はランダムに表示し、ポジティブ語、ネガティブ語に関するエピソードの想起の順序は対象者の任意とした。対象者の発話に対し、調査者は、うなずきや相づちを交えて聞いたほかは特別な介入はせず、できるだけ自由な発話を促したが、AMT の手続きにならない、時間や場所などの特定のない general な発言に対しては、<特定の出来事としてはどんなことがありましたか?>といった形で質問を行った。

すべての調査に要した時間は、一人当たり約30分であった。

結果と考察

**分析方法** 分析にあたっては、Baddeley & Wilson (1986) を参考に、エピソード性 *episodicity* と詳細の豊富さ *richness of detail* の観点から評定を行った (Table 1)。エピソード性とは、主に記憶の特定性にかかわる評価基準である。想起課題のうち、ポジティブ語-ネガティブ語に関するエピソード全24発話に関して、評定基準をもとに臨床心理学専攻の大学院生1名が筆者と独立に評定したところ、筆者の評定との一致率は79.2%であった。不一致であった評定については、再度検討した上で得点を算出した。

**発話の評定** 12人の対象者のうち、先にポジティブ語について想起した人は8人、ネガティブ語について想起した人は4人であり、度数に関しての有意差は見られなかった。次に、エピソード性得点の平均値を算出したところ、全24発話において1.92点 (SD=0.64)、ポジティブ発話において2.0点 (SD=0.60)、ネガティブ発話において1.83点 (SD=0.72) であった。また、ポジティブ、ネガティブにかかわらず対象者の第1発話、第2発話について平均値を算出したところ、第1発話は1.75点 (SD=0.62)、第2発話は2.08点 (SD=0.67) であった。ポジティブ-ネガティブ、第1-第2それぞれの発話のエピソード性について、対応のあるt検定を行ったところ、

有意差は見られなかった。一方、詳細の豊富さ得点に関する平均値は、全24発話において1.67点 (SD=0.75)、ポジティブ発話において1.67点 (SD=0.78)、ネガティブ発話において1.67点 (SD=0.78) であった。ポジティブ、ネガティブにかかわらず対象者の第1発話、第2発話に関して平均値を算出したところ、第1発話は1.33点 (SD=0.65)、第2発話は2.0点 (SD=0.74) であり、第1-第2それぞれの発話の詳細さ得点について対応のあるt検定を行ったところ、有意差が見られた ( $t=-2.15, p<.05$ )。これらの結果について、Table 2にまとめて示す。

以上の結果は次のように言える。まず、エピソード性得点、詳細さ得点の平均はいずれも2点未満であった。すなわち、多くのエピソードは、時間的・空間的定位があいまいで、細部がそれほど詳細でないかたちで想起されていた。手がかり語に関し、「いつもそう。いつも〇〇できなくて、△△だから」(発話の例) というように、特定のか概括的かといえば、抽象的で概括性の高い想起が主であったと言える。対象者による調査の感想でも、「日頃から意識していたことだったので、特定の場面がすぐに思い浮かばなかった」「なんとなく一般化されてしまい、感覚としてそういう性格だとは思いますが、特定の例は挙げにくかった」といった具体化、特定化の難しさが列挙されていた。

Table 1  
想起されたエピソードの評定基準 (Baddeley&Wilson, 1986)

エピソード性 <i>episodicity</i> に関する評価	詳細の豊富さ <i>richness of detail</i> に関する評価
3点：時間や場所が特定できるエピソード記憶 →いつ、どこで、誰が、どうした、が再生できること	3点：非常に詳細である
2点：個人的だが特別ではない出来事・時間や場所が特定不能な出来事 →例「いつも川に釣りに出かけていたよ」	2点：詳細はあいまいである
1点：漠然としている個人的な記憶 (特定の出来事への言及なし) →例「チェスが好きなんだ…どんなゲームをしたか? 思い出せないよ」	1点：「現実の」記憶だが詳細を欠く
0点：無反応、意味記憶に基づいた反応 →例「投げる、っていうと、すぐ思いつくのはボール投げかな…」	0点：記憶なし (no memory)

Table 2  
想起されたエピソードの評定平均値 ※ ( ) 内は SD

エピソード性 <i>episodicity</i> 得点		詳細の豊富さ <i>richness of detail</i> 得点	
ポジティブ-ネガティブ	第1発話-第2発話	ポジティブ-ネガティブ	第1発話-第2発話
2.0(0.60) 1.83(0.72) n.s.	1.75(0.62) 2.08(0.67) n.s.	1.67(0.78) 1.67(0.78) n.s.	1.33(0.65) 2.0*(0.74)
全発話	1.92 (0.64)	全発話	1.67 (0.75)

\* $p<.05$

我々が日々体験していることの記憶のなかで、少なくとも自己に関するエピソードは、いわば現実のコピーのように細部までそのままに保存されるというよりは、一般化、抽象化といった変形を受けたかたちで保持されやすいのかもしれない。今回、それぞれの発話で想起の手がかりとなったのは、自己への適合度の高い語であるが、ある事象を自己の特性として認識するに至る過程では、類似の体験の積み重ねや反復想起が行われていると考えられる。そうした中で、手がかり語が示すような個別のエピソードは省略や合理化といった変容を受け、イメージや具体的知覚にまで何度も立ち返る必要のない程度に安定性や省エネルギー性を高めるのではないか。というのも、自己認知のあり方は、その人の自己存在に関する安定感や一貫性の感覚に大きくかわるものと考えられるが、日常生活で体験することがらは、雑多で多様・大量の情報を有しており、効率的かつ安定感を損なわないような方向での処理が必要となってくる。そうした場合、一定の参照枠の使用が有効であり、それに基づいて種々のエピソードはトップダウン的に細部が捨象されるなどの処理を受け、抽象化された自己認知・自己知識的な意味記憶として成形されていくのかもしれない。

こうした現象には、スキーマやスクリプトといった情報処理過程の働きを援用できる。スキーマは、前述のとおり、過去経験を構造化した認知的枠組みであり、スクリプトとは、ステレオタイプな出来事の系列に関するひとまとまりの知識であるが (e.g. Schank & Abelson のレストラン・スクリプト)、理解の際に新しい情報を組織化するための枠組みも提供するという。これらは、いずれも事象の認識や理解における処理効率を著しく高めるものとされ (川崎, 1985)、スキーマ化、スクリプト化を活用して、日々の体験にまつわる記憶は自己に組み込まれていくのかもしれない。そうした処理を既に通過しているだけに、自己への適合度が高い語に関して想起されたエピソードは特定性を欠いたと言える。刺激として手がかり語を呈示せず、たとえば自分の長所、短所に関連するエピソードを自発的に想起してもらおうといったボトムアップ的な処理を促すと、また異なる結果が得られる可能性もある。顕在的検索 (エピソードティックな検索) よりも潜在的検索の方が、成績が良いとの指摘はプライミング研究ではなされている (太田, 1991)。

一方、先行研究においては、健常群ではなく、抑うつなどの臨床的な問題を呈している人々の記憶がしばしば概括的であることが指摘されている。今回、抑うつのような指標を使用していないため、単純な比較は難しいが、臨床群に類似した結果となったのは、以下のとおり、エピソード収集の形態の違いと、発達の理由が考えられる。まず、従来の研究におけるエピソード収集は筆記によっているが、本研究の収集法はインタビューであった。

今回の対象者は全員、調査者である筆者とは初対面であり、そうした相手と一対一で、なおかつ初めて通された調査室で自らについて話すことが求められるという設定のために、率直な自己開示への抵抗感が働いた可能性はある。ただ、エピソードの詳細さに限っては、第1発話と第2発話の間に5%水準で有意差が見られ、第2発話の方が詳細な語りとなっていたことから、エピソードの特定性が獲得されるわけではないにしても、状況や聞き手に対する慣れによって、想起活動そのものは活性化するのではないかと考えられる。

また、高齢者を対象に、本研究と類似の手続きをとった野村 (2002) では、本研究のように、手がかり語に対する特定のエピソード想起において、全体的に抽象化・一般化が目立ったといった結果は報告されていない。今回の対象者は大学生であるが、その発達課題は、個性化や社会化、そして自我同一性の確立にあると言われる。すなわち、彼らにおいては、自己概念と、自己に関する個々の記憶は、まさに表裏一体となって双方向に影響し合っているさなかにあるのかもしれない。エピソードだけでなく自己概念そのものも活発に書き換えられ、入れ替えられているために、具体的な想起を難しくさせていた面もあるのではないか。実際、調査場面では、手がかり語について、「○○と○○で迷った」「ひとつを選ぶのはとても難しかった」といった感想も聞かれた。さらに、下島 (2004) は、自伝的記憶の想起には自分の過去を時間的に体制化する能力が必要であると述べており、大学生は高齢者に比べ過去の時間的体制化が進んでいない可能性が本調査の結果に反映したのかもしれない。このように、今回の結果は、青年期における空間的・時間的認知を含む発達状況・発達課題との関連も併せて理解する必要があるだろう。

連想について 第1発話、第2発話の後に連想したことの自由想起では、第1発話に関連する連想を述べた者が2名、第2発話に関連する連想を述べた者が7名、両発話に関連する形の連想を述べた者が3名であった。ポジティブ、ネガティブ語の別で見ると、ポジティブ語に関連する連想を述べた者が3名、ネガティブ語に関する連想を述べた者が6名であった。度数としては、第2発話において想起されたネガティブ語関連エピソードに対する連想を行った者が最も多かった (5名)。連想内容の質的検討を行ったところ、手がかり語に対するエピソード想起時には言語化こそしなかったものの、意識の上では、類似の活動・体験が次々と連想されていたことに言及した例や、想起課題Aにおける発話を補足するような周辺的な情報について抽象的、断片的に言及する例が大半であった。連想時、ポジティブ語、ネガティブ語両方に言及した3名については、ポジティブ語、ネガティブ語に関し (以下の発言については、便宜的にそれぞれ

〇〇, ××と表記する), 「〇〇と思われてるけど, みんなの中では××という役割なのかな。多分, グループの中で自分が立場っていうのを確立してきてる中で, この二つの言葉っていうのが絡んでくる要素が大きいなと思った」, 「そこまで親しくない人の前では〇〇だけど, 仲が良くなると××になる。…どっちも私だけど, なんか矛盾してるな, と思った」と, 両方の語を組み込んだ連想を行い, 発話の最後に自己を振り返っているような発言が見られた。

自己の連想について, どのようなことから連想したと思うか尋ねたところ, まず, 「今考えるとほかの行事も思い浮かぶんですけど, (想起課題 A で話したのは) 新しいこと, 楽しいことをしたって思い出…印象的, 楽しかった順かもしれない」「××の方は, (身近な人の怒りに触れた) 強烈なエピソードがあるから」と, 感情の強さが想起の手がかりになっていることがうかがえた。また, 「(想起課題 A について) 話しながら, こういうことってよくあるなと思って」「今, お話をする中で, 『あっ, そういえば…』と思うようなところがあって, だんだん『こんなことがあった』って思い浮かんだかなっていうのがあります」と, 想起された記憶そのものが次なる想起の手がかり刺激となりうることや, 「人に話す」という対人的状況が想起を促進する可能性が示唆された。なお, 参考までに, 想起課題 B で言及された連想に対しても, 第 1 発話, 第 2 発話と同様, エピソード性, 詳細さに関する評定を行ったところ, 得点の際立った上昇や低下は認められなかった。つまり, 多くの連想は, 第 1 発話, 第 2 発話と同様, 特定性は乏しかったが, 半数の例 (6 例) において, 筆者が能動的に対象者の発話の一箇所をとらえ, 具体的な時期やその当時の気持ち, 現在気持ちの変化はあるかなどについて質問を行ったところ, 思い出そうとしているような多少の間を伴いつつ, 時期や場所, 人物の特定がなされ, 前後の状況や細部に関する詳細さも高まった。その一方, 筆者による能動的介入に対しては, 「いろんなことを話してるうちに, どれがどうだったのかまともになくなって, 矛盾してるような気がした」との感想も聞かれた。

これらの結果をまとめると次のようになる。まず, 聞き手に対してあるエピソードが言語化される時, それは類似の経験や情報の中で中心的, 代表的なものであり, 言語化されない部分においても, 関連する記憶表象は活性化されているものと考えられる。その際, 感情の強さが記憶の検索手がかりの一つとして想起を促進することは, Bower (1992) ほか多くの研究者が指摘しており, その極端な例として, 臨床群では, 過去に体験された強烈な感情が現在でも生々しさを保って持続するといった, 記憶と感情の極端な結びつきが見られる (e.g. van der Kolk et al., 1996)。しかし本研究では, 想起課題 A にお

いて強烈な感情体験を語った例でも, 「よく思い出しているできごとで, だんだん思い出すことや話すことが嫌ではなくなった」と感想を記載しており, 反復想起によって感情価が薄らいだり, 語れるまでに距離をとれるようになっていたりしていることがうかがえる。一方, 自己認知や自己評価に関することについてみた場合, 自発的な想起の特定性や詳細さは必ずしも十分でないが, 想起しながら語るとい話し手の行為そのもの, さらに聞き手側の関心や発語行為により, 話し手における記憶情報の検索や開示, 異種のエピソードを同じ次元で再構成する作業が促進され, 細部の補完やエピソードの時間的・空間的定位, 自己認知の見直しが行われうることが示唆された。こうした知見からは, 記憶の想起がきわめて動的 dynamic かつ多層的で, 相互交渉的な面を大いに含んだプロセスであることがうかがわれる。ただし, 動的であることは揺れやすさ・定まらなさや表裏一体でもあり, 個人によっては, 想起行為や言語化, 聞き手としての他者の存在が, 内的な秩序の混乱や不安定感を招く可能性も留意しておく必要があるだろう。

## 研究 2

ここでは次のような点を検討する。自己の記憶が想起される場面や想起された記憶の性質, あるいは, その人が自己の記憶をどう捉え, どう取り扱っていくのかといった処理的側面に関し, 一般的な傾向をとりまとめた研究は見られない。そのため, 研究 2 では, 自由記述による質問紙調査を実施することを通して, 記憶の想起機序や取り扱われ方についてより幅広い一般的なデータを得ることとした。

## 方 法

**対 象** 大学生 202 名 (男子 111 名, 女子 91 名;  $ME = 19.11$ ,  $SD = 1.05$ ) に対し, 質問紙にて自由記述を求めた。

**質問項目** 研究 1 のインタビューや高橋・清水 (2000) の記憶特性質問紙参考に, 次のとおり設定した。(1) 以前のできごとをどの程度思い出すか (2) どんなことをどんな時に思い出すかの例 (3) 過去のできごとはおおむねどのような形, イメージで記憶に残っているか (背景や表情, 色や匂い, 前後の状況など) (4) 『楽しいこと・嫌なこと・どちらでもないこと』を思い出す割合 (%) (直感的に) (5) 嫌な記憶にはどのように対処しているか (6) 過去の記憶を人に話すのはどんなときか (7) 『記憶』ということばから何を連想するか。予備調査を行い, 質問の意図が伝わりやすいよう, 言い回しの工夫を行った。回答に要する時間は約 20 分であった。

## 結果と考察

分析 想起の頻度や内容について、クロス集計表を作成し、カイ二乗検定を行った (Table 3)。その結果、「以前のできごとは時々思い出す/いろいろな種類のことを幅広く思い出す」の組合せを選択した人が有意に多かった ( $p < .05$ )。次に、快・不快・ニュートラルの各感情の比率について平均を算出したところ、順におおむね40%：40%：20%となり (実際の数値は0.42：0.42：0.18であった)、男女間の平均値に有意差は見られなかった。また、質問項目の(2)、(3)、(5)～(7)の5項目については、得られた記述に対し、それぞれKJ法を用いて内容分類を行った。その結果をTable 4に示す。なお、項目(2)に関しては、教示の理解に誤解が生じたか、あるいは考えにくい設問であったのか、「どんな時に」か「どんなことを」の片方しか記載していない人が多く存在したため、それらの分類についても付している。

頻度と想起のタイプ 択一式に大まかに分類したものはあるが、いろいろなタイプの思い出を幅広く、時々思い出すがもっとも多いという結果となった。また、頻繁に過去の出来事を思い出している人は、同じことを何回も想起している傾向が認められた。また、この調査では、202人中178人 (88%) が、過去の出来事を時々～よく思い出しており、想起とは、少なくとも大学生においては一般的でなじみのある行為と言える。

想起のタイミングと内容 基本的には、過去の実体験と似たような現在の体験や、つらい・楽しいといった感情、写真やテレビ、音楽などの媒体、場所などが、想起を促す手がかりになっていることが多いようである。何かを思い出す時としては、寝る前、ほっとしている時・暇な時、一人でいる時などが挙げられ、抑制が緩んだ場面に想起が生じやすいことがうかがえる。内容的には、手がかりに関連した事柄、別離してしまった人物との思

い出などに加え、つらい思い出や悩み、失敗といったネガティブな内容が、ポジティブな内容に比べて思いの外、多く想起されるようである。こうした現象も、自己確立や社会的な集団への適応といった青年期的な発達課題の達成過程における葛藤が関連しているのかもしれない。

どのようなイメージで記憶に残っているか 記憶が保存されている状態そのものは現認できないので、厳密に言うとは、過去体験をどのように想起しているかに関する問いとなる。今回の結果では、多くの人が、記憶を映像的にリアルに想起でき、人物の発言や表情、背景、色や匂いなども当時と同じように認識できると記述していた。当時の状況どおり、あたかも現前でそれが起こっているかのように想起できるという回答も複数見られた。ただ、映像的ではあるが、前後の状況ははっきりしないなど、断片的、不連続的に想起している人も多いようである。うっすら・おぼろげ・かすんでいる、と不鮮明さを強調したり、セピアなどへの色合いの加工、想起の視点が第三者的になっていることへの言及も見られた。なお、映像のように細部までリアルに想起するという人が多い一方、物体や絵、写真といった静止画としてとらえている人もおり、基本的に、記憶の想起における情報性の多寡や運動性の付随の程度は非常に個人差が大きいと考えられる。今回は記述の対象となる記憶の種類や内容を指定していないが、当然、記憶によってもリアルであったりそうでなかったり、といった差異は見られるだろう。

全体的には、想起の際に生じる感情についてはそれほど強調されておらず、リアル・映像っぽいなど精緻さを挙げた記述においてもニュートラルなニュアンスが感じられた。その時と同じかそれに近い形で想起するといっても、客観的、中立的に距離を置いたかたちで想起が行われていることが示唆される。

随伴感情比率の検討 斎藤 (1993) によると、想起された自伝的記憶に随伴する感情の比率は、快：50-60%、

Table 3  
思い出す頻度と想起のタイプとのクロス集計表

	想起のタイプ			合計	
	同じことを何回も思い出す	いろいろな種類のことを幅広く思い出す	どちらともいえない		
頻度	ほとんど思い出さない	0*	3	5**	8
	それほど思い出さない	9	2*	5	16
	時々思い出す	46**	60**	31	137
	よく思い出す	26**	11	4*	41
	合計度数	81	76	45	202

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$



Table 4  
記憶想起の態様に関する KJ 法結果

※ ( )内は度数

2. どんな時にどんなこと思い出すかの例 (総計 170)

つらい時に、つらい思い出を (8) 写真・テレビ・本・音楽を手がかりに、それに関係する思い出を (8) 似たような体験をした時、当時のことを (8) 友人と話している時、当時のことを (7) 思い出の中の場所に来た時、当時のことを (6) ふとした瞬間、つらいこと・いやなこと・失敗を (5) 一人である時、大事な人とのつらい思い出を (4) 寝る前に、つらかったことを (3) ネガティブ気分の時、ポジティブな思い出を (3) 友達と話している時、楽しかったことを (2) ぼ一つとしている時、自分の悩みや友達のことを (2)

どんな時に思い出すか: 似たような体験をした時 (8) 寝る前 (7) 暇な時 (7) 一人である時 (6) 友人と話をしている時 (5) ぼ一つとしている時 (3) 入浴中 (2)

どんなことを思い出すか: つらかった体験・失敗したこと・うまくいかなかったこと (11) 今は離れてしまった友人・恋人との思い出 (5) 小さい頃の思い出 (5) 高校時代の楽しい思い出 (2) 昔と今の自分の違い (1) テレビで見て面白かった光景 (1)

3. 過去のできごとはおおむねどのような形、イメージで記憶に残っているか (背景や表情、色や匂い、前後の状況など) (総計 170)

映像・映像っぽい (50) リアル (44) おぼろげ・ぼんやり・はっきりしない (14) はっきりしている (9) 特定の色彩がある (青~黒・セピア・白黒・クリアな水色 (6) 人物の動きや発言が印象的 (6) 第三者的な視点 (3) 言葉と行動のみ (3) 感情が断片的によみがえる (3) 楽しい思い出だけがよく出てくる (3) 絵・写真く (2) 物体として (1) よくわからない (3)

5. 嫌な記憶にはどのように対処しているか (総計 198)

無対処 (36) 意図的に忘却 (35) 代替思考 (23) 回避 (「考えないようにする」) (18) 気晴らし行動をとる (15) 積極的な気持ちの切り替え (14) 寝る (12) 言語化 (「人に話す」「ひとりごと」) (11) 感情的になる (「人に当たる」「泣く」) (9) 接近 (考えてみる) (8) 教訓とする (7) 対処できない (3) 夢の中で対処 (1)

6. 過去の記憶を人に話すのはどんなときか (総計 192)

楽しい時 (17) つらい時 (12) 人と話している時、自分に似たような経験があった時 (12) 友達との思い出話の時 (12) 全く話さない (11) 自分だけでは限界の時 (行き詰まった・本当につらくなった・どうしようもない) (10) 相手を信頼した時 (10) 気分が乗った時 (9) その時の話の流れ (8) ふと思いだした時 (8) あまり話さない (8) 自分を知ってほしい時 (7) 信頼できる人と一緒にいる時 (7) 酒の席 (7) 聞かれた時 (5) いつも話している (5) 関連する話題が出た時 (4) 相手が自分の過去を話してくれた時 (4) 話題が途切れた時 (4) 笑いをとりたい時 (3) 久しぶりの再会時 (3) 食事中 (2) 忘れて、なんとも感じなくなった時 (1)

7. 『記憶』ということばから連想すること (総計 261)

思い出 (32) 過去 (31) 昔 (17) 大切なもの (6) 経験 (5) 勉強 (5) つらい (5) 記憶力 (4) 楽しい (4) 脳 (4) 暗記 (3) アルバム (2) 音 (2) 以下、各 (1) : 日記みたいなもの、話のネタ、悲哀、美化、フィルム、子ども、大切なもの、眠り、友人、憤怒、喪失、石板、歴史、消せないもの、差別、時間の無駄、いじめ、あてにならない時がある、今の自分を作っているもの、神経衰弱、深層心理、生活、一生の宝、掘り起こしてはいけないもの、青春の3-7p、頑張っている、いらぬもの、喚起、軌跡、儂いイメージ、映像作品、いつか忘れる、カオス など

不快：20-30%，その他：10-20%であり，これは，異なる年代群を通じて比較的安定しているとされる。本研究はこれとは一致しないが，斎藤らは具体的な記憶を筆記により自由再生させた上でそれらに関し快・不快度を評定させており，そのように，エピソードの具体的表現を促すと快感情がより強く意識されるというのは，たとえば個体の安定感を維持するためといった理由がかかわってくるのかもしれない。本研究の結果からは，少なくとも具体的な言語表現を求めない限りにおいては，大学生は快的な記憶，不快な記憶のいずれも同程度の量，認識もしくは重み付けしている可能性が推察される。

**不快な記憶への対処** もっとも多く選ばれたのは「特に何もしない」という無対処であった。「自然にまかせる」「気持ちが治まるまで待つ」というような，いわば受身的な形での対処と関連づけて記載している人もいた。そうした試みがどの程度成功しているのか判断する外的な基準は今回設けておらず，不快記憶に対処しないことが，ひとつのコーピングとして有効なのか，あるいはコーピングスキルをもたないゆえの選択なのかは不明である。もっとも，自由記述の結果であるだけに，意識されていない対処は記載されていないわけで，無対処グループではより無意識的な処理プロセスが進行している可能性もある。一方，「忘れようとする」と意図的に忘却する試みも同程度の割合で選択されている。これも，成功しているのかは確認できないが，臨床群には過去体験へのこだわりが多く見られることから，まず「意図的，能動的に忘れようとする」ことができる，ということが重要なことかもしれない。他には，「楽しいことを考える」「音楽を聴く」などの代替思考・気晴らしや，「今は今だと思って割り切る」「あれはあれではない，というふうに立ち直る」といった積極的な気持ちの切り替え，「人生の糧にする」と教訓へ結びつける，人に話すといったごく日常的に見られる対処が選択されている。これらについても，成功しているかは確認できないにしても，不快記憶に能動的，主体的に関与しようとしている点では共通しており，大学生の一般的な像と言えるかもしれない。主体的関与の最たるものとして，「考え込む」「反すうする」など，不快体験への接近が挙げられる。「思い出すだけ思い出すと，まあいいやと思えてくる」「あんなこともあったんだな〜とムカつきながら思うといつか消えてしまう」との言及からは，記憶を忘却したり，随伴する感情から距離をとるにあたって，再想起・能動的想起の効果が示唆されていると言えよう。

**人に過去の記憶を話す動機** 感情の高まり・沈み込みや，他者と共有した過去への注意の高まり，自己の体験に関連する話題への関心などが，他者に自分の過去について話す動機づけのひとつとなるようだ。酒席や食事中など，抑制が緩むとともに時間・空間の共有感覚が高ま

る場面も，過去体験に関する自己開示を促進するようである。

また，回答からは，記憶を媒介として他者と関係性を紡ぐという重要な機能がうかがえる。そのひとつは，自分自身について他者に伝える，わかってもらおうといった，いわば伝達機能である。自分ひとりではつらさ・きつさが限界であると感じるような場合は特に，他者からのサポートを得るための重要な役目を果たしているようである。相手と似たような経験がある場合に，自己の経験を伝えることによって相手に役立ててもらおうといった，他者との互助的な関係性の強化も生じ得るようである。場合によっては，過去の体験は，場の流れをつくり，雰囲気や盛り上げる格好の話題とされており，それは，だれかと過去のできごとについて率直に語り合うことと同様，親密感の創生を期待しての道具的使用と言える。これらからは，「自己の記憶，過去の体験を話す」ということが，高い対人志向性をもって機能していることがわかる。

なお，信頼できる人という時，相手を信頼した時（例：「この人なら自分を見せてもいいなと思った時」）に話されやすいというのも，目を引く結果であった。これは，記憶がそれだけデリケートかつその人自身に密着した個別的なものであることを示しており，取り扱いにあたっては慎重さや尊重する姿勢を欠いてはならないだろう。

「記憶」から連想するもの「記憶」とは明確な定義づけが難しいが，最後に，大学生における「記憶」の一般的な意味づけ・イメージについて示唆を得たい（連想は多岐にわたっており，似た内容でまとめることに限界があったため，Table 4 では，この項目だけ，KJ法による分類ラベルのほかに少数意見も記載してある）。楠見・高橋（1992）が，記憶をどんなメタファー（比喻）でとらえるかについて一般人のデータを収集した結果，記憶は場所や空間に蓄えられたものであり，記憶の状態は時間とともに変化し，記憶内容が浮かんだり沈んだり，さらに混沌とした状態，減衰・消滅に向かうと理解されていることが示唆された（丸野，1994）。この項目では，記憶そのもののメタファーではなく，記憶という言葉から連想されるものを自由に挙げてもらっており，楠見らと多少違う側面が浮かび上がっている。まず，「思い出」「過去」「昔」等の度数の多さから，記憶が基本的に現時点からみて前のことを指向しているといったイメージがわかる。大多数の人には，現在一過去の時間軸や距離感が存在しているのだろう。また，本研究では「想起」に焦点を当ててきたが，この項目で挙がっている「勉強」や「脳」といった記録に関する側面，「一生の宝」のような保持に関する意味づけも，記憶の重要な働きである。さらに，他の連想内容をおおまかに見ていくと，「今の自分を作っているもの」「思い出して元気になれるもの」「その時どれくらい強く生きたかの証」などのポジティ

ブイメージ、「過去による呪縛」「時間の無駄」「迷走」「神経衰弱」などのネガティブイメージ、「すぐそこまで出てきそうで出ないもの」「イヤなものであり、よいものでもある」「正しかったり正しくなかったり」など、感情価との強い結びつきや両価性への注目が見られることが一つの特徴である。また、感情価としては比較的ニュートラルなメタファーで表現したものとしては、「デカイクローゼット」「石板（自分の過去がはっきり刻まれているものとして）」「青春の3ページから7ページにかけて」「画像が実験的な映像作品」「カオス」等が見られる。すなわち、大学生にとっての記憶とは、ポジティブ・ネガティブをはじめとするさまざまな感情状態や、記録媒体としての絶対性・虚構性を同時に含み込んだ多層的な装置であり、時には自身の糧として、時には自分を苦しめるものとして、その位置づけを多様に変容させていくもの、といったイメージになるのではないか。

### 総合考察

今回の研究では、大学生を対象に、自己に関するエピソード想起の特質や、自己の記憶の位置づけ方・取り扱い方の一端についていくつかの示唆を得た。もっとも、研究1は特に、限られたサンプルによる少ないデータであるし、研究2についても、場面や場合を細かく指定しない自由記述によっているため、記憶の想起や位置づけ方の特徴を網羅的に示したものは言えない、といった限界がある。それらの問題に加え、臨床群について同様の調査を行っているわけではないことから、結果の拡大解釈や安易な比較検討には慎重にならなければならないが、今回得られた結果を基礎研究・ひとつの基準点とすれば、臨床群の特質はどのように考えることができるか、最後に試論を行いたい。

まず、本研究から、自己認知にかかわる記憶情報は抽象化・一般化されており、聞き手からの質問のような刺激をきっかけとした想起・発語行為そのものを通し、再構成的に表出される可能性が示唆された。通常、情報処理の省力化、個体の安定化のためにスキーマが働いているものと考えられ、捨象された細部は、他者とのやりとりなどの刺激の中で顕在化してくるようである。逆に言えば、自己認知がスキーマ化されていないと、その都度個々のエピソードに立ち返る必要が出てくることとなる。したがって、たとえば、エピソードを逐一再現しようとするクライアントでは、自己認知が安定しておらず、忘れることを含んだエピソードのほどよい選り分けが難しいといった問題があるのかもしれない。また、大学生の想起の様相から、状況や聞き手に対する慣れや、想起しながら語るという話し手としての行為そのもの、さらに

は聞き手側の関心や能動的関与との相互交渉によって、想起活動の活発化やエピソードの時間的・空間的定位、自己認知の再構成が行われる可能性が推察された。臨床群においても同様のプロセスが生じ得るのかは、今後、事例や実験的アプローチを交えて更に検討する必要があるだろう。

次に、少なくとも今回対象とした大学生においては、おおむね想起行為になじみ、快・不快にかかわらず幅広く過去体験を意識しているが、そこには時間軸や一定の距離感が存在していることが推測された。また、多くの人にとって、過去の記憶は、映像のようにリアルに想起されるが、その際、感情の強烈な再体験は必ずしも伴わないようである。不快感情を伴う記憶についても、忘却や代替思考を促進するよう意図的にコントロールしようとする、主体の統制がある程度働いているようだった。翻って、臨床群における記憶の問題は、強い感情そのものが記憶され (LeDoux, 1992)、それが主体の統制や時間性を超えて不随意的に想起されるといった特徴をもつとされている (外傷性記憶)。ここではあえて単純に対照するが、健常群でみられた結果と併せて考えると、想起に生起する感情価の低減、時間感覚の回復などが、外傷性の記憶における改善の指標となりうるかもしれない。それがどのように達成されるかの手がかりとして、今回の調査では反復想起や能動的想起によって、記憶に随伴する感情から距離をとっている様子が示唆された。PTSD研究者の van der Kolk (2002) は、外傷体験を思い出すことはそれを再び経験することと同じではなく、出来事は自分の歴史に属するものであるとの認識を促す意味合いがあると述べており、今後は、こうした観点に立って、臨床群における想起のプロセスやその変容をとらえていくことも必要だろう。

最後に、本研究では、個人にとって自分の記憶が多様かつ重要で、自己と密着したものと認識されており、その取り扱いには尊重と慎重を期すべきことが示唆された。一方で、想起行為そのものには高い対人志向性が認められ、前述のとおり、他者とのやりとりを通して思い出したことを話す、話しながら思い出すといった有機的・再構成的な性質のほか、他者との間で伝達的に働いたり、道具的に対人関係を媒介するといった機能的側面が明らかとなった。これらは、人の記憶がもつ基本的な性質や機能であると考えられる。多くの場合クライエントセラピストという関係性をベースとする心理臨床場面においても、上記のような記憶の特性をふまえて、「今ここで」、「セラピストに対し」、クライアントによって自己の記憶が話されることの意味合いや意義を理解することが必要であろう。

## 引用文献

- Baddeley, A. D. & Wilson, B. A. (1986). Amnesia, autobiographical memory and confabulation. In Rubin, D. C. (Eds.), *Autobiographical memory*. Cambridge University Press. Pp.225-252
- Bartlett, F. C. (1932). *Remembering: A study in experienced and social psychology*. Cambridge University Press. (宇津木保・辻正三訳 1983 想起の心理学 誠信書房)
- Bower, G. H. (1992). How might emotions affect learning? In Christianson, S. A. (Ed.), *The handbook of emotion and memory: Research and theory*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum. Pp.3-31
- Brown, N. R. & Schopflocher, D. (1998). Event cueing, event clusters, and the temporal distribution of autobiographical memories. *Applied Cognitive psychology*, 12, 305-319
- Conway, M. A. & Pleydell-Pearce, C. W. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, 107, 261-288
- 藤本裕子 (2004). 記憶の想起特性と関連する諸要因についての検討 — 青年期健常群を対象に — 九州大学大学院人間環境学府修士論文 (未公刊)
- 藤本裕子・印刷中 心理臨床と記憶研究 — その概観と展望 — 九州大学心理臨床研究第25巻
- 古澤頼雄・齊藤こずゑ・都筑学 (編著) (2000). *心理学・倫理ガイドブック リサーチと臨床 日本発達心理学会監修 有斐閣*
- 古山宣洋 (1994). 共同想起 — 他者との出会いのなかでつくられる過去 教育と医学 42(11), 1013-1020
- 堀内 孝 (1998). 自己認知の多次元性と自己関連付け効果 心理学研究, 68(6), 484-490
- 稲葉緑・大平英樹 (2003). 情動的刺激に対する選択的注意が高不安者の再認記憶に及ぼす影響 心理学研究, 74(4), 320-326
- 井上毅・佐藤浩一 (編著) (2002). *日常認知の心理学 北大路書房*
- 神谷俊次 (2002). 自伝的記憶の想起に及ぼす感情の影響 南山大学紀要アカデミア 自然科学・保健体育編, 10, 1-15
- 川崎恵理子 (1985). 記憶におけるスキーマ理論 小谷津孝明 (編著) *認知心理学講座2 記憶と知識 東京大学出版会* Pp.167-196
- 桐村雅彦 (2000). 記憶の体制化 臨床精神医学講座21 脳と行動 中山書店 Pp.272-281
- 小林多津子 (1992). <親密さ>と<深さ> — コミュニケーション論から見たライフヒストリー 社会学評論, 42, 419-434
- 小谷津孝明 (1985). 記憶と進化・発達・解体の視点 認知心理学講座2 記憶と知識 東京大学出版会 Pp.1-34
- 楠見孝・高橋秀明 (1992). メタ記憶 安西祐一郎ほか (編) *認知科学ハンドブック 共立出版* Pp.238-250
- LeDoux, J. E. (1992). Emotion as memory: Anatomical systems underlying indelible neural traces. In Christianson, S. (Ed.) *The handbook of emotion and memory*. Hillsdale. 269-288
- 丸野俊一 (1994). 記憶の世界を探る 丸野・針塚進・宮崎清孝・坂元章 ベーシック現代心理学1 心理学の世界 有斐閣 Pp.101-132
- 森 直久 (1995). 共同想起事態における想起の機能と集団の性格 心理学評論, 38(1), 107-136
- 森岡正芳 (2002). 物語としての面接 ミメシスと自己の変容 新曜社
- Myers, L. B. & Brewin, C. R. (1994). Recall of early experience and the repressive coping style. *Journal of Abnormal Psychology*, 103(2), 288-292
- 長井真理 (1988). 「悲劇」の生成としての境界例 村上靖彦編 境界例の精神病理 弘文堂 Pp.17-45
- Neimeyer, G. J. & Metzler, A. E. (1994). Personal identity and autobiographical recall. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The Remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. New York. Cambridge University Press. Pp.105-135
- 野村晴夫 (2002). 高齢者の自己語りと自我同一性との関連 — 語りの構造的整合・一貫性に着目して — 教育心理学研究, 50, 355-366
- 岡野憲一郎 (1995). 外傷性精神障害 岩崎学術出版社
- 太田信夫 (1991). 記憶のつめあと プライミング — もう一つの記憶 イマーゴ 青土社 46-51
- Putnam, F. W. (1997). *Dissociation in children and adolescents*. The Guilford Press, London. (中井久夫訳 解離 — 若年期における病理と治療 — 2001 みすず書房)
- 斎藤洋典 (1993). 自伝的記憶 (III): 想起数と想起内容に対する想起年齢の影響 日本心理学会第57回大会発表論文集, 550.
- 佐藤浩一 (2000). 思い出の中の教師 — 自伝的記憶の機能分析 — 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 49, 357-378
- 佐藤浩一 (2001). 自伝的記憶 森敏昭 (編著) おもしろ記憶のラボラトリー 北大路書房 Pp.15-36
- 佐藤浩一 (2002). 自伝的記憶 井上・佐藤 (編著) 日常認知の心理学 北大路書房 Pp.70-87
- 下島裕美 (2004). 自伝的記憶の時間的体制化 — 過去経験の記憶を時間軸という視点でとらえる — 自伝

- 的記憶研究の理論と方法 日本認知科学会テクニカルレポート51, 9-11
- 高橋雅延・清水寛之 (2002). 記憶特性質問紙による自伝的記憶の研究 日本心理学会第66回大会発表論文集, 944
- 谷口高士 (1997). 記憶・学習と感情 海保博之編「温かい認知」の心理学：認知と感情の融接現象の不思議 金子書房 Pp.53-75
- 谷口高士 (2002). 感情とエピソード記憶 高橋雅延・谷口高士 (編著)「感情と心理学」北大路書房 Pp.100-121
- 上原 泉 (2003). 記憶の発達 月本洋・上原泉著 想像 ナカニシヤ出版 Pp.134-169
- 植之原薫 (1993). 同一性達成過程における『事象の記憶』の働き 発達心理学研究, 4, 154-161
- van der Kolk et al. (1996). Traumatic Stress. The Guilford Press London. (西澤哲 (監訳) ト라우マティック・ストレス — PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて— 2001 誠信書房)
- van der Kolk, B.A. (2002). Posttraumatic therapy in the age of neuroscience. *Psychoanalytic dialogues : a journal of relational perspectives*. 12 3, 381-392
- Williams, J.M.G. & Broadbent, K. (1986). Autobiographical memory in attempted suicide patients. *Journal of Abnormal Psychology*, 95, 144-149
- Williams, J.M.G. & Scott, J. (1988). Autobiographical memory in depression. *Psychological Medicine*, 18, 689-695